

発表者 野澤 菊枝

テーマ 「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について」

まず初めにスライドの左上の番号が間違っていたので、そちらはなかったものとして見ていただけたらと思います。野澤と申します。よろしくお願いいたします。

一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について、発表させていただきます。

一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方、そもそも実現が可能なのでしょうか。今すぐに実現することは、やはり困難であるのではないかと考えております。一人ひとりが抱える困り感、100人いれば100通りです。その1つ1つに対応するには、人もお金も時間も足りません。どれだけ文科省や教育委員会が方針を打ち出したとしても、各学校や教職員の皆さんに委ねられている以上、全てにおいて不足していると感じています。

まず、困り感を知るためには、その子どもたちがどういったことに困っているかということを経験してくれなければ、分かることができません。小中学生であれば、体調や気持ちをうまく言語化することがとても難しく、ましてや子ども自身が病気や障害などに気づくこと、周囲との違いに気づくことも困難です。また、目に見えない病気や障害などは、親や教員であっても、なかなか分かりません。そういった病気や障害、特性などがあると知らなければ気づくことができません。知識があるのか、知っているのかどうか、そこがとても大きな分かれ道になると感じています。間違った認識や思い込み、古い常識や価値観により理解が得られなかったり、心ない言葉をかけられたりすることがあります。そういったことで伝えることを諦めてしまうお子さんや保護者の方も多くいらっしゃいます。学校や家庭、地域との信頼関係と連携、知識を得る機会がとても重要であると思います。

困り感と申し上げましたが、様々なものがあると思います。APDやディスレクシア、ディスグラフィア、色覚異常、聴覚過敏などなど、娘たちが発症している起立性調節障害もそうですが、そういったものに対しては1つ1つ、例えば音声の文字化であったり、音声の読み上げ、UDフォントの使用、様々な配慮や別室、オンライン、ICTなど、それを可能にする、困り感を安心に変えていく体制は整いつつあると思いますが、これらをそれぞれの子どもたちに届けるために、どれぐらいの時間がかかるのでしょうか。実際に娘たちが学校に行けなかったことを通して、なかなか、今すぐに届けていくことは難しいなと感じております。

そこで私が考えるのは、「特別ではなく当たり前に」という教育環境の底上げです。一部の子どもたちだけではなく、どの子にとっても学びやすい環

境と、その選択ができるような体制があるといいなと思います。

例えば、1つの例として取り上げますが、電子黒板が導入されたときに、電子黒板の光がっらいといった声があったのをご存じでしょうか。電子黒板の彩度やフォント、配色、音量、音が出る前の声掛け、席の移動など、明確なガイドラインがあれば、現場でもそれに従うことで、たくさんの子どもたちにとっての過ごしやすい環境が確保できるのではないかと思います。また、黒板のとり方についてですけれども、ただ黒板を書き写すというだけではなくて、プリントやPDFで配布する、端末で黒板の写真を撮る、音声を文字化する、文字を読み上げるといったツールを使う。端末で文字を入力するという方法があってもよいのではないかと思います。

あと、これは私が活動の中でお伝えしていることでもあります、義務教育を終えた後の選択肢がたくさんあるよということを、大人も子どもも知ることがとても大切だと思います。困り感を抱えている子どもたちは、中学校を卒業した後、自分の進路はどうなるのだろうか、親御さんもこの子の未来はどうなるのだろうかという不安を多く抱えていらっしゃるのですが、定時制だったり、チャレンジスクールだったり、通信制だったり、高卒認定、単位制、留学、全日制以外の選択肢があり、高校は3年でなくてもいい。勉強はいつからでもどこからでもできるし、自らがつかみ取っていい道があるのだよということを知ること、見えてくる世界がたくさんあると感じています。ちなみに長女は都立のチャレンジスクールを5年間かけて卒業し、大学生になっています。

新しい時代を生きる子どもたちには、学びやすく生きやすい道を選んでほしい。それができる時代なのだからこそ、そう思うのですが、何があってもあなたなら大丈夫と、子どもたちが持つ生き抜く力を信じる。大人の、よかれやものさしに当てはめるのではなく、環境をつくるのが大人の役目だと考えています。それぞれの子どもたちにとって、学びやすく生きやすい選択肢をと考えます。

全ての子どもたちにとって、その場所と時間と出会う人たちが最高の教育環境にありますように、これが私の中にある一番の願いです。特別な対応ということではなくて、どの子にとっても過ごしやすく、学びやすい環境を整えることで、困り感のある子どもたちも過ごしやすくなっていくのではないかと。その上で、そこでもさらに足りない子どもたちにとっての支援ということを考えていけると、もっともっと先生方も子どもたちも家庭も前に進んでいけるのではないかと思います。

以上です。

区 長 スライドの2枚目でしたか。それで、学校の資源がないというのは、まさにそのとおりだとは思いますが。一人ひとりの困っていることとか、一人ひとりの困っていることだけでも、こんなにたくさんいろいろなことがあるのに、ニーズに対してどう応えていくかというのは本当に大変だなと思っているのですけれども、その中で、学校現場で最初にやれること、もし、教育委員になられて最初にやれることというのはどこになるのですかね。端的に言うと。

野 澤 今ここに挙げているのは、何かしら対応をすればできるよ、少しは軽減されるよということですよ。なので、まずそれを知ること、知識として得ることだと思っています。私は一番下、娘たちが患っている病気ですけれども、これについての例えば先生方の研修をしてほしいですとお話をしているのですが、現場にいる先生方が、まず知っているかどうかということでも全然違うと思うので、私はまず知っていただくことかなと思っています。ちなみに教職員研修、今年実現をさせていただいたのですが、教育委員会指導室にお話をしてから実現するまで3年です。かかりました。なので、なかなかすぐに届けることはできないのですが、現場で子どもたちと相対している先生方が知っていることで、まず一歩が違う。保護者にかける言葉も子どもたちにかける言葉も違う。本来であれば保護者も子どもたちも知っている、自分も気づけるし、親も気づけるという意味では、いい信頼関係と連携を築けるのではないかなというふうに思っております。

区 長 あと、もう1つ、この後のスライドでキャリアの話が出てきたではないですか。今後のその進路の選択の話が。これは実際に今、現場ではこういう情報というのはなかなか得られにくいのですか。

野 澤 そうだと思います。まず先生方が全日制以外の進路の選択肢をあまりご存じではないからこそ、相談されても答えにくいとか、学校に行けない子どもたちだと親御さんも学校に行く機会もないですし、なかなか、外に出にくくなってしまって、情報を得るというのがすごく大変ですね。あと、知っていたとしても、詳しくその制度を知らないとか、いろんなものがあると思います。でも、本当に選択肢はいっぱいあります。

区 長 要は、一人ひとりのニーズの教育をするのだったら、まずは現場が一人ひとりのニーズを知って、かつ、選択肢を与えるところも学ばないといけないということですかね。

野 澤 でも、それは学校だけにしてもらうことではなくて、保護者も同じように学んでいかなければいけないことだと思っています。